

聾学校高等部生徒の障害認識に関する調査研究

佐藤 純子

I. 問題

聾学校中・高等部の「自立活動」の指導内容・方法については、卒業後の生徒の実情を参考にすることが重要である(東京教育委員会, 2000)。

聾学校の自立活動の項目にある「障害認識」の指導内容として言語訓練や発音訓練や聴能訓練だけでなく、生徒が自分の障害を知ることや自分に適したコミュニケーションについて考えること、そして社会とのつながりについて考えることが含まれており、「社会参加」にとっては大きな意味をもたらす。

高等部生徒は小学部児童や中学部生徒と比べて、家庭や学校や学校外などで実際に聴覚障害が原因による困難な場面に直面することがより多くあり、社会参加の入り口の段階にもあるため、「障害認識」は高等部生徒にとって大事である。それ故、聾学校高等部生徒の障害認識に関する研究の必要性が高い。

II 目的

本研究では、これから社会に巣立つ高等部生徒が、自分自身の障害についてどのように認識し、また、聾学校という聴覚障害生徒中心の生活環境が生徒にどのような影響を及ぼしているのかをアンケート調査で明らかにすることを目的とする。

III 方法

1 対象生徒 聾学校 3 校の高等部生徒 38 名を対象にした。内訳は 1 年 10 名, 2 年 16 名, 3 年 12 名。男子 24 名, 女子 14 名。

2 質問項目 森田ら(1999)「聴覚障害児の障害認識に関する一考察」、中野・吉野(1999)「聴覚障害の心理」、相良ら(2003)「聴覚障害学生の障害認識に関する研究」を参考にし、予備調査の結果も踏まえて 26 項目設定した。他にフェイス

シート 6 項目を用意して基礎情報を得た。

3 調査方法 高等部の教師に質問文を 1 つずつ説明してもらい、生徒に回答させた。調査は平成 18 年の 5 月, 8 月, 9 月に実施した。

4 分析の方法 学校や個人の経験や環境が違うことが考えられるので、フェイスシートをもとに学校間, 学年間, 生徒間で比較して違いはあるか, 分析を行った。また, フェイスシートとアンケート調査結果を分析して結果をまとめた。

上記の結果にもとづいて高等部生徒が自身自身の障害についてどのように認識し, また, 障害認識に対しての環境(背景)がどのように影響しているかを中心に考察した。

IV 結果

調査結果を, コミュニケーションについて, 発音・読話訓練について, 普通学校に対する意識について, 不利について, 知識について, 成人聴覚障害者・社会行事について, 気付きや経験について, 心理的側面についての 8 つの観点から述べる。

1 「コミュニケーション」に関して

友達同士(聴覚障害)とコミュニケーション手段として手話を使用している生徒が 38 名中 27 名(71.1%)であった。

街の中で友達に手話を使って話すのは恥ずかしいという質問に対して, 過半数が「いいえ」と回答した。

手話が分からない人と会話するのは大変かと尋ねた結果, 「はい」と「いいえ」がほぼ同数いることがわかった。

手話をどのようなきっかけで覚えてきたのかについては, 先生や先輩から教えてもらったという回答が多い。

聞こえる人たちに手話を覚えてもらってコミュ

ニケーションを取りたいと思う生徒が 25 名 (65.7%) であった (図 1)。

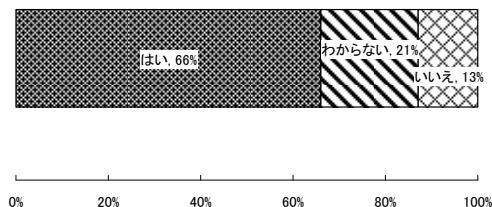


図1 聞こえる人たちに手話を覚えてもらってコミュニケーションを取りたいと思いますか？

2 「発音・読話訓練と聞こえ」に関して

発音・読話訓練を受けなければならない理由として、社会に出て、聞こえる人とコミュニケーションを取るためには、発音が大事だと考えている生徒が約半数いる。

耳が聞こえるようになればいいなと思う生徒が 27 名 (71.1%) であった。

3 「一般校に対する意識」に関して

一般校へ入りたいと思ったことがあるという回答が多く、25 名 (65.8%) であった。その理由として、たくさん友達を作りたい、聞こえる友達と一緒に勉強したいという意見が多かった。

聾学校の交流プログラムでは、聞こえる小学校、中学校、高校との交流を行っている。普通学校と交流する前にどんな気持ちかを尋ねた結果は「不安はある」と回答した生徒が約半数いる。

4 「聴覚障害による不利」に関して

回答から生活の中で、情報バリアとコミュニケーション困難があることが分かった。

5 「聴覚障害に関する知識」に関して

聴導犬について知りたいかという質問に半数の生徒が「はい」と回答した。

「耳のしくみ」「手話学習」「福祉制度」などの知識は聾学校で習うことが多いが、十分とは言えないことがわかった。

聴覚障害は手術で治ると思わないが最も多く 26 名 (68.4%) であった。

6 「成人聴覚障害者、社会行事」に関して
実際に社会に出ている聴覚障害者からの話を聞いて勉強したという生徒が多い。

聴覚障害に関する施設を見学してみたいかという質問に対する回答は「はい」、「わからない」、「いいえ」に分かれた。

聴覚障害に関する行事に参加した生徒と参加していない生徒が約半数いる。

7 「聴覚障害に対する気づきや経験」に関して

補聴器のことでからかわれた経験がある生徒が 13 名 (34.2%)、ない生徒が 20 名 (52%) いた。

聴覚障害であることを気づいたきっかけとして「覚えていない」が一番多かった。

8 「心理的な側面」に関して

高等部生徒は社会に出てからの不安があると回答したのは 24 名 (63.2%)、わからない 11 名 (28.9%) である (図 2)。

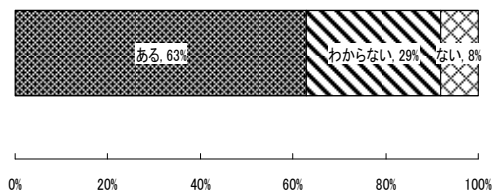


図2 社会に出て、職場で聴覚障害について理解してもらえようか不安はありますか？

自分が障害を持っていることに対して「恥ずかしい」と思ったことがある人は 14 名 (36.8%) で思っていない人は 22 名 (57.9%) であった。

家族みんなで会話する時に孤立したと感じたことがあるのかには「はい」が 13 名 (34.2%)、「いいえ」が 21 名 (55.3%) であった。

先生の言うことがわからなくてもわかったフリをすることがあるかという結果は、「もう 1 回」と言えなくてわかったフリをする生徒が 26 名と 70% 近くいた。

聴覚障害について悩むときに聴覚障害者に相談したかについては「ある」が 10 名 (26.3%)、「ない」が 25 名 (65.8%) であり、聴覚障害を持つ

ている人と相談していないと分かった。

自分に聴覚障害があることを理由に夢をあきらめてしまった生徒は 20 名 (52.6%) であった。

卒業した後、初めて会う人たちの前で、自分の障害を理解してもらうために努力をする必要があると答えた生徒が最も多く 32 名 (84.2%) と分かった (図 3)。

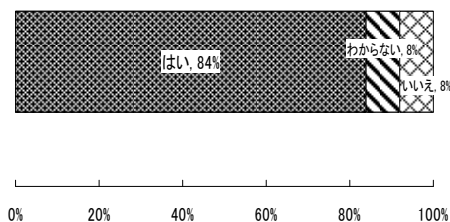


図3 卒業した後、初めて会う人たち(周りの人たち)の前で、あなたが持っている障害を理解してもらうために努力をする必要がありますか?

V 考察と今後の課題

高等部生徒は手話に対して肯定的に受け取り、聞こえる人たちに手話を覚えて欲しいという意識があることが分かった。また、自分の障害について理解にもらうためには自分で説明できるようにしたいという気持ちがあると考えられる。

しかし、社会に出たら、自分の障害について理解してくれるか、コミュニケーション出来るのか不安になっている生徒が多いと分かった。

社会に出ている聴覚障害者の姿を見る機会が少なく、生活の中で聴覚障害者としての見方や生き方を示してくれるモデルがいないと生徒自身の障害に対する意識や理解が育てられないと考えられる。また、現在の社会では、その点でまだ聴覚障害者に対する配慮、設備が不十分である。いずれにしても、高等部生徒が不利と考えていることは、まとめて言えば「情報保障」の問題であると考えられる。

聾学校は聴覚障害者の集団形成の場であるため、学校外の人たち(聞こえる人と社会に出ている聴覚障害者)と交流する機会が足りなく、聾学校は聴覚障害者の集団形成の場であるため、学校外の人たち(聞こえる人と社会に出ている聴覚障害者)と交流する機会が足りなく、コミュニケーション

など経験が少ないと思われる。また、教師はほとんど聞こえる人であるし、生徒の親も 9 割は聞こえる人なので、聞こえることへの憧れを持つ生徒がいる。

聴覚障害を持つ成人は自分たちの生活を「不利」だと思って生きているのだろうか。このことを考える機会を学校教育の場で持つことが大切であると思う。成人聴覚障害者の話を聞く会に、高等部生徒は大変興味を持っている。しかし、現実には話を聞く時間や内容が限られてしまう。成人聴覚障害者が職場だけではなく、地域・家庭で、どのような生活をしているのか体験したことを知る学習が大切であると考えられる。

社会に出ている聴覚障害者と交流するため、モデルとして聴覚障害をもつ教師を増やしていくことが必要であろう。

障害認識は「自立活動」という特設の時間に学習して身に付けるだけでなく、授業や休み時間等、普段の生活の中でも身に付けるものである。

教師や親は聴覚障害による不利や困難に直面している生徒たちに対して、適切な働きかけが必要と考えられる。

文献

- 東京都教育委員会 (2000) コミュニケーション指導等の研究委員会報告. トータルコミュニケーション研究会.
- 森田正子・太田富雄 (1999) 聴覚障害児の障害認識に関する一考察. ろう教育科学, 第 41 巻, 第 2 号, 1-15.
- 中野喜達・吉野公喜 (1999) 聴覚障害の心理. 田研出版, 162-169.
- 相良啓子・斉藤佐和・根本匡文 (2001) 聴覚障害学生への障害認識に関する研究. ろう教育科学, 第 4 巻, 第 3 号, 51-65.
- 全国聾学校長会教育課程第二部会編 (2001) 聾学校における専門性を高めるための教員研修用テキスト 2001 年改訂版. 全国聾学校長会.